

男子乳腺に原発した粘液癌の1例

広島大学医学部第二外科

片岡 健・西亀 正之・松山 敏哉

山根 基・久代 淳一・土肥 雪彦

男子乳癌は比較的稀な疾患で、全乳癌の1%前後と言われている。更に、浸潤癌特殊型に属す粘液癌も、比較的稀である。今回、男子乳腺に原発した粘液癌の1症例を経験したので、若干の文献的考案を加えて報告する。

症 例：65才，男性，無職。

主 訴：右乳房腫瘍。

家族歴：特記すべき事なし。

既往歴：大久野島毒ガス工場に勤務。

現病歴及び現症：昭和60年3月頃より、右乳輪直下の腫瘍に気づいていたが、疼痛もなく放置していた。その後腫瘍が漸次増大し、昭和61年3月13日、当院第2内科受診。同年3月17日、当科紹介された。腫瘍は右乳輪部を中心に、3.3×3.0 cm 大、弾性硬、辺縁明

瞭で、皮膚に浮腫を認めた。(図1)リンパ節腫大なし。Xeromammography 及び Echo にても、悪性を疑わせた。A. B. C にて癌と診断し、同年3月26日入院した。

入院時検査成績：胸写、骨シンチ、肝エコー、胃透視等に異常なく、一般検査も正常であった。CEA 2.3 ng/ml, CA 15-3 3.4 U/ml と正常範囲内であった。

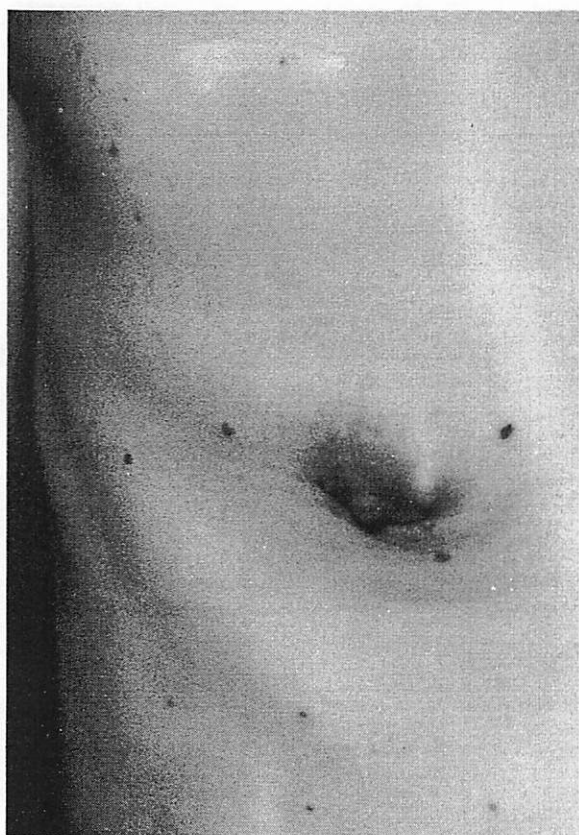
細胞診所見(図2, MGG×400):大量の粘液中に浮遊して、辺縁明瞭な浮雲状集団を形成して散在。しかし、核の大小不同は少なく、異型性に乏しい。

臨床診断：右乳癌 T_{4b} N₀ M₀ (Stage IIIb)

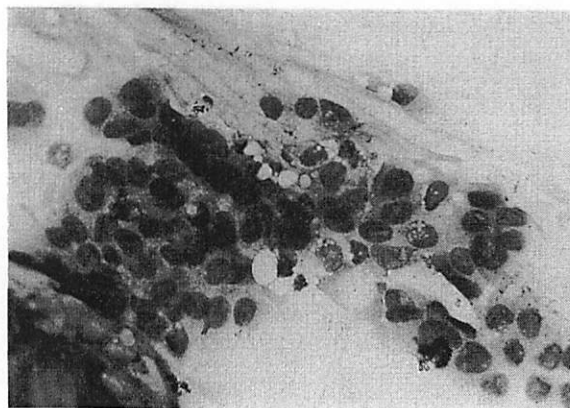
治療：昭和61年4月1日、右定乳切 (Br+Ax+Mj+Mn) 施行。ホルモンレセプターは、ER, PgR 共に陽性で、後後7日目より、Tamoxifen 20 mg/日、連日経口投与とした。同年4月17日退院し、現在、当科外来にて follow up 中である。

病理組織学的診断(図3, HE×200):充満した粘液中に、小胞巣を形成した細胞が浮遊せるが如き像を呈して増生している。他の組織形態を示す癌巣は見られず、又、皮膚への潤浸像を認めるも、リンパ節への転移は見られなかった。mucinous carcinoma, pure type (t₃ n₀ m₀, stage II) と診断された。

男子乳癌の発生頻度は、一般に全乳癌の1%前後とされている。当科においても過去20年間に4例、1.4%の頻度であった。本疾患は、特に男性である事から、



(図1)

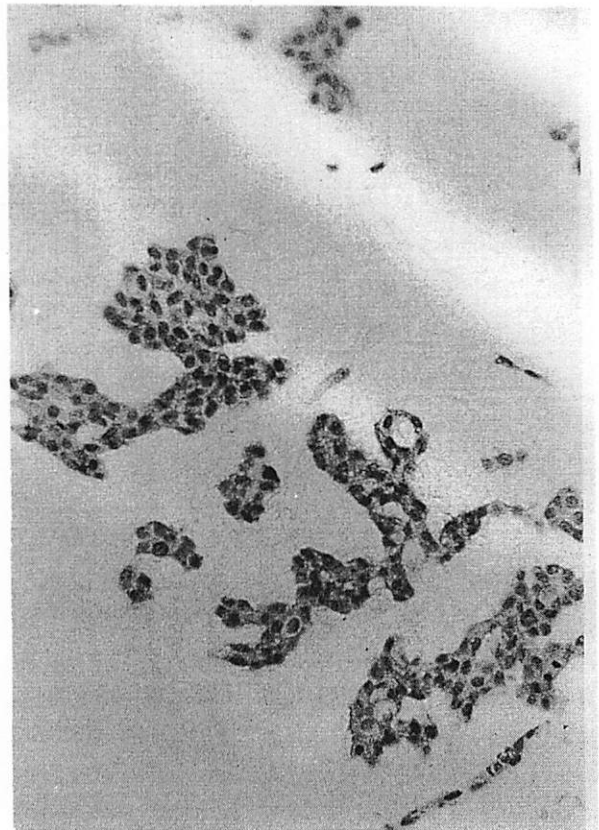


(図2)

乳腺に対する関心も少なく、従って早期に発見され、治療されにくい。又、周囲組織が少ないため、早期に局所進展や、リンパ節転移を起こし易く、一般に予後不良と言われている¹⁾。病因としては、遺伝、外傷、女性化乳房、estrogen 剤投与などが考えられているが定説はない。その治療は、女性乳癌に準じるが、一般に ER の陽性率が高く、ホルモン療法併用が有効と思われる²⁾。一方、粘液産生を特徴とする粘液癌の発生頻度は、全乳癌の 1 - 5% と報告されている³⁾。当科においては、これまで 7 例 (2.4%) 経験しているにすぎない。粘液癌の予後は比較的良く、特に純型の粘液癌の成長は遅く、転移しにくいと言われている⁴⁾。本症例も、純型の粘液癌と考えられ、しかも ER、PgR 共に陽性である事より、その予後は良いものと期待している。

文 献

- 1) 泉雄 勝：男子乳癌. 癌と化学療法, 8: 1518-1527, 1981.
- 2) M. A. Friedman ら：Estrogen receptors in male breast cancer. Cancer 47:134-137, 1981.
- 3) 小池綏男ら：乳腺粘液産生癌の外科臨床的ならびに組織化学的検討. 外科診療, 26: 903-907, 1984.
- 4) F. Clayton: Pure mucinous carcinomas of breast. Human Pathology 17:34-38, 1986.



(図 3)